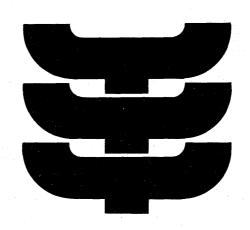
# 大野城市の文化財

第 七 集 国指定特別史跡特集号



大野城市教育委員会

#### ▶目

#### 次◀

序	2
「大野城市の文化財」(第7集)の刊行によせて	ġ
「水城跡」の追加指定と「大野城跡」指定拡張に関する経過について …	4
大野城跡	6
大野城遺跡地図	7
大野城の遺跡	8
大野城と大宰府の防衛線	10
大野城遺跡	12
大野城跡に登る	14
水城跡	16
水城跡	18
水城詩情	20
水城の大堤とわたし	22
古老聞書	23
あとがき	24

#### 序

「大野城市の文化財」第7集は「国指定特別史跡特集号」として「大野城跡」と「水城跡」について集録しました。

この二つの史跡は往時国防のかなめであっただけでなく、万葉の歌人たちの詩心を動かして多くの秀歌を生み、また、住民の心に産土(うぶすな)の情をはぐくんでまいりました。市民の理解と愛護によって、いつまでも美しくこの姿を残したいものです。本集の刊行にあたって、文化庁保護部長吉久先生をはじめ、調査・研究にご尽力いただき貴重な原稿をお寄せくださった多くのかたがたに、紙上を借りて厚くお礼申し上げる次第であります。

昭和50年3月

大野城市教育委員会

教育長 阿部哲郎

## 「大野城市の文化財」(第7集)の刊行によせて

#### 文化庁文化財保護部長 吉 久 勝 美

ヨーロッパを旅行した人であれば、各国至るところに巨大な歴史の遺産が残されているのに驚かされる。わが国のそれとはまったく対照的ではあるが、なかでもイタリアの古代遺跡は見る者をして啞然たらしめる。長い歴史の重みがのしかかってくるような迫力を感じさせる。そしてこれらの遺跡が第二次大戦の戦火からまぬがれた奇跡に驚嘆する。人間には「人類共通の遺産」を守らねばならない使命が、国とか民族とかを超えてあるのだーと思わずにはいられない。

近年わが国でも「文化財」を守ろうという世論が高まってきているが、そのなかで日本人として特に考えねばならないことがいくつかある。その一つに「わが国特有の文化、歴史」についての理解と認識がある。「日本」という国土の中で、営々と築かれてきたわが国の文化や歴史に対する深い「思いやり」である。この「思いやり」を通して日本人の心を守るという自覚がない限り「文化財」は泥瓦にも等しいものといわざるを得ない。全国に「文化財」といわれるものは数多い。その地方独特のものもある。これら先人の貴重な遺産は国民共有の財産なのであり、遠い過去から今日に引き継がれた日本民族の心である。

「どのように保護し、どう活用するか」という問題がその辺にある。 国指定や県指定、あるいは市指定文化財を問わず「文化財を守る」こと は現代に生きるわれわれの責務であることを自覚するとともに、広く国 民の財産として保護し、次の世代に満足すべき状態で引継がねばならな い。 (前福岡県副知事)

### 「水城跡」の追加指定と「大野城跡」指定拡張に関する経過について

昭和47年6月27日、大宰府史跡整備対策委員会から出された「大宰府歴史公園の基本構想」によれば、大宰府史跡は万葉の時代から数世紀にわたって西日本における政治、外交、文化の一大中心地であったことを示す貴重な遺産であり、その歴史的起源は平城宮より古く、7世紀初頭の飛鳥の諸官と並ぶ時代にまでさかのぼるといわれているが、これらの防衛線として築かれた「大野城跡」、「水城跡」も、その「大宰府史跡」と同一の評価を必要とする相関関係を持っている。

近年、福岡大都市圏の発展と相俟って、当該地域での開発が進行しているが、この地域 内の自然環境と史的環境の保存と活用をはかるためにこの構想が打ち出されたのである。

その主なものは---

- 1. 大宰府都城地区を「史跡地域」として整備する
- 2. その周辺地域を「史的環境保全地域」として整備する
- 3. これらの周辺にひろがる自然景観を保持するため、山地についてはほぼ「100m以上」、 丘陵地については必要な箇所を「自然環境整備地域」として整備する

となっているが、この整備事業は極めて広範なものとなっている。しかし、整備完成後は まさに画期的な「歴史公園」が出現するわけで、わが国における史跡保存と活用のモデル ケースとなることは否めない。

本市所管の「水城跡」については、下大利区内(昭和28年3月31日指定)のものと、上 大利谷蟹のものの二つがあるが、谷蟹のものは昭和48年度事業として緊急買いあげの対象 となり、昭和49年8月10日付官報告示で、国指定特別史跡に追加指定された。

大野城跡については、現在粕屋郡宇美町にかかる分が約35カ所と門跡5カ所、石垣3カ 所が点指定されているが、先述するような理由をも含めて、文化庁から面指定の意向が関係市町に打診されて今日に至っている。本市分については昭和48年2月26日と6月16日に 史跡対策委員会の審議にかかり、翌49年2月20日、正式にほぼ100m以上の地域について の指定拡張が史跡対策委員会に諮問されたのである。

その間、史跡対策委員会としては県の明治 100年記念事業の一環として取り組まれている「県民の森」、樹芸林とのかかわりや、市が独自に計画している「少年自然の家」、白木原、瓦田・釜蓋の区・共有地の取扱いなどについて慎重に審議を行った結果、次頁のような答申を市長宛に提出したのである。

この結果は県教委、文化庁宛に伝えられ、宇美町、大宰府町(当分保留)の態度決定を まって、指定拡張(いわゆる追加指定)の官報告示という段取りになっているが、指定はほ ぼ本年8月頃の告示になるのではないかと推定されている。(中央公民館長 井原信一)

大史対委第10号 昭和49年2月21日

大野城市長

森山幸雄殿

大野城市史跡対策委員会 会長 古賀 八郎

昭和49年2月20日付で諮問があった「国指定特別史跡大野城跡の指定拡張に関する件」 について審議した結果、次のとおり答申します。

արակարանիրում արտանիրում արտանիրում իրում արտանիրում արտանիրում անդարանիրում անդարանիրում անդարանիրում անդարանիրում անդարանիրում անդարանիրում անդարանիրում անդարանիրում անդարանիրում անդա

本市内にある国指定特別史跡は、下大利区内の「水城跡」と、指定予定の上大利区内の「小水城跡」の二カ所でありますが、「大野城跡」は歴史的にも我が国最古の山城として極めて貴重なものであり、また、自然環境保全の見地から標高 100m以上の指定拡張については、基本的に了承するものであります。

本委員会としては、次のことについて十分な配慮をされ、適切な措置を講じられるよう 希望するものであります。

- 1. 大宰府歴史公園、県民の森(含、樹芸林)、将来設置が予測される市の公共施設と指 定との関係を明確にされること。
- 2. 区有地(白木原)、共有地(瓦田・釜蓋)については、当該区と十分協議をされること。
- 3. 該当する私有林については、除かれること。

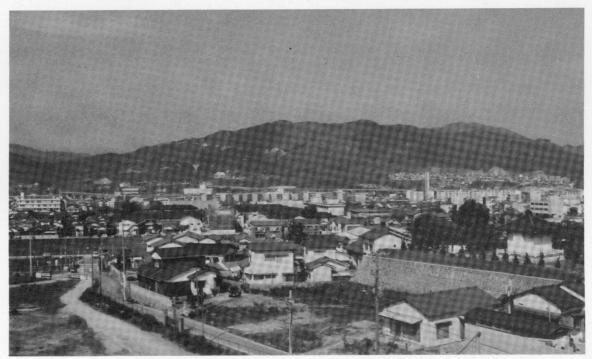
昭和49年9月19日付で諮問があった「国指定特別史跡大野城跡の指定拡張に関する線引き」について審議した結果、次のとおり答申します。

記

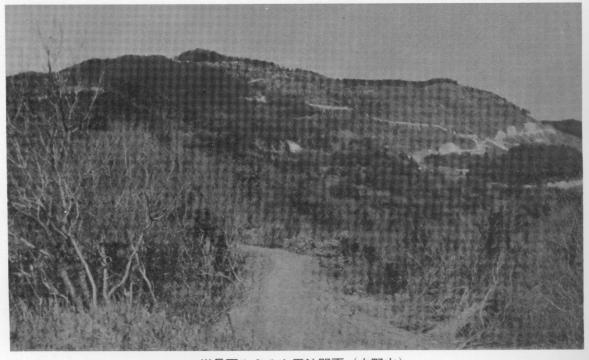
本委員会としては、去る2月21日の答申が十分に尊重されており、提示された「線引き」について、異議なく了承します。

#### 要 望

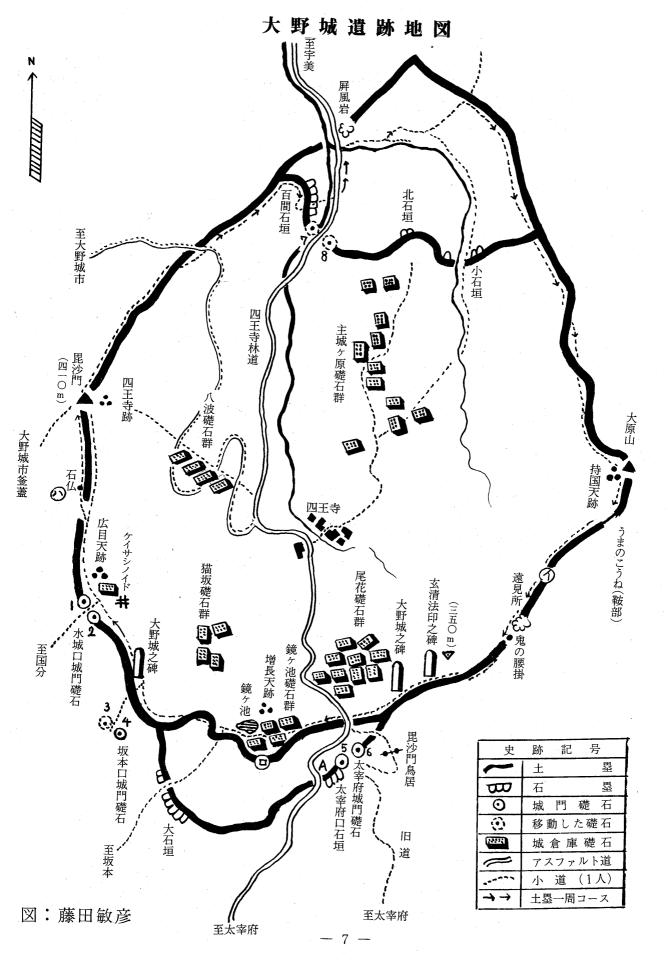
向後関係機関と連絡を密にし、その保存整備について有効適切な措置を講ぜられるよう 要望します。(大史対委第13号 昭和49年9月24日)



大利小学校からみた大野山 (四王寺山)



増長天からみた毘沙門天 (大野山)



横田義章

大野城市の東方にそびえる大野山(四王寺山)に大野城が築かれたのは、奈良時代の書物によれば今から約1300年程前の665年(天智天皇4年)のこととなっています。

ここに城を作る必要がうまれたのは以下のような理由がありました。そのころ朝鮮半島にあって日本とも交渉のあった百済が、その隣国で唐の援助を受けた新羅に戦いで敗れ、日本に救援を求めました。これは 660年(斉明天皇6年)のことです。斉明天皇はただちに九州に自から出向き、本拠を朝倉橋広庭宮としましたがまもなくなくなり(661年)、天智天皇が母斉明天皇にかわり百済に援軍を派遣して新羅・唐の連合軍と戦いますが結局大敗してしまいました。 663年のことで「白村江(はくすきのえ)の戦い」といわれています。その後、西日本各地に、各種の防御的施設(のろし・城)を急ぎ作りはじめました。そのうちの1つが大野城なのです。また太宰府が現在の地におかれてその内容が整備されるのも対外的な情勢とは切りはなして考えられないので、このころのことと考えられます。

天智天皇は白村江の戦い以後4年間に記録に残された城だけで、水城を含めて7つの城を築城しています。他にも記録にないものや、後の奈良時代も含めるとひじょうにたくさんの城が作られていることになります。それも北西九州を中心としていますので、大野城と同じような目的のためであり、そのころの対外的な危機感というものはかなり大きかったのでしょう。大野城の位置はいうまでもなく「遠の宮延」といわれた太宰府と接しており、このため、太宰府を防衛するのが重要な任務であったことはいうまでもないでしょう。

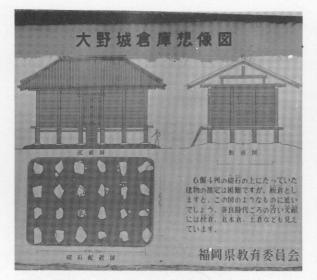
大野城は、日本ではいちばん古い城のひとつですが、同じそのころ作られた城とともに「朝鮮式山城」と呼ばれています。朝鮮半島のあちこちにも作られた城と同じく、相手方から攻めて来られた時には、附近に住んでいる人が多勢逃げ込んで、長い間そのまま自活していけるような作りになっています。

大野城は、四王寺山塊の尾根筋を総延長約5.2kmの土塁・石塁でとりまいて城の輪郭としています。また北側と南側だけは二重の塁を作っていて、平面形はひし形にちかく作られています。土塁は巾が6~7mくらいあります。

谷川が土塁と接する部分は特に、石垣にしたり、石と土を混合した工法もみえます。

山麓から大野城跡を訪ねるにはいくつかの道がありますが、城内の礎石がある場所が、 宰府口、大宰府裏手の坂本口、水城方面の水城口とありますから、城門のあった場所から 見て歩くとよいでしょう。坂本口には他に石垣も残っており、城門がこの石垣辺にもあっ たかもしれません。

北方から城内に通じる道―宇美口は今は四王寺林道が通じて太宰府町まで完全舗装されてしまい、旧道はその林道わきに点々と廃道となって残っていますが通ることは困難でし



ょう。この宇美口は四王寺川が城内から流れていて、内側土塁と接する場所は百間石垣と呼ばれる、最高所約7m、長さ約200m近い巨大な石垣があり、水害などのたびに破損がすこしづつみられます。この石垣の一部を調査してみますと、川附近の石垣の基底部外側は特にていねいに工作をし、巾1mくらいの平坦部を張り出させていることがわかりました。

この宇美口にも城門があったことは、以前から3個の礎石が見つかっているのではっきりしています。 宇美八幡宮には半分程のものが2個、四王寺集落には、昭和46年夏の大水で洗い出されていたものが発見され、それが保管されています。これは完全なも

のです。川と百間石垣と城門がどのような位置で作られていたのかはまったく不明です。

城の内部には、四王寺の盆地がすっぽりとつつみ込まれていて、こういう所で農生産を続けながらでも長期に城中にこもることができるように工夫して地形を選ぶということも、この種の朝鮮式山城の特長のひとっです。これはこの大野城を考える上にはいちばん重要なことかもしれません。

大野城を作るのを直接指揮したのは、百済から亡命してきた、憶礼福留とか四比福夫などという人でしたが、よほど高い技術水準であったにちがいありません。

大野城では、内部に「礎石群」と呼ばれる40棟近くの建物の跡が残っていて有名です。主城原・尾花・鏡 ケ池・猫坂・八ッ波などでみることができます。

これらの礎石群は、その礎石の配置状態からみて、ほとんどのものは $6m \times 10m$ くらいの面積の倉庫と考えてさしつかえありません。焼米が出ることもあります。

鏡ケ池地区にある礎石のある建物跡を、数例以前に発掘調査しましたが、地表の観察でわからないことがいるいる見つかりました。建物を囲っている雨落ち溝があったことや、同じように掘立柱列が囲っていることなど興味深いものでしたが、特に、礎石の建物をとりかこんで掘立柱があるというのは調査4棟中3棟あり、貴重な資料です。

城内には井戸も各所に備えていて、山の中とはいってもその施設の内容などはよく整備されて、まさに都 城の最たるものといってさしつかえないものです。

大野城は奈良時代には四天王像をまつり新羅に対したということです。このころまではまだ新羅という対外的なものを意識していますが、実際の城としての役割りは、平安時代には次第になくなってきて、むしろ宗教的な山として栄えました。四王寺山という名もそこから来ているのですが、私達が毎日見る山が、殺ばつな山でなかったことは喜んでよいと思います。 (九州歴史資料館学芸第二課技官)

## 大野城と大宰府の防衛線

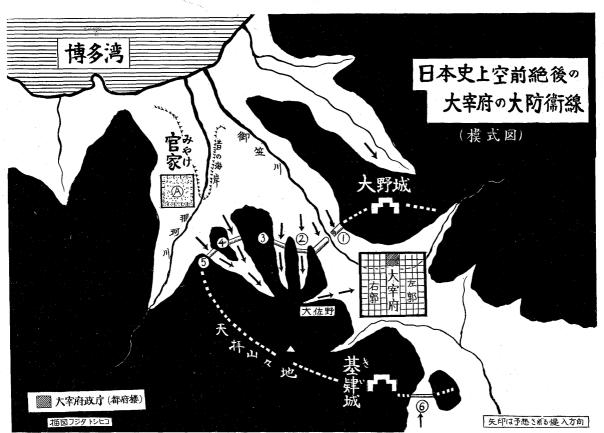
藤田敏彦

飛鳥時代の終り頃、大宰府を守る城が百済の憶礼福留と四比福夫という二人の築城技師によって、 都府楼の後の大野山(四王寺山)に築かれました。この城を大野城といい、朝鮮式山城で日本最古の 城です。

山頂は中がくぼみ山憶(やまふところ)の地形になっていますのでまわりの峰に5.2 kmにわたる土塁や石塁(谷の部分だけ)が、ほぼ菱形に築かれ、その内側(城内)に軍用倉庫等が設けられました。土塁の外側即ち下から見上げる急峻な山はだが熊本城や名古屋城の石垣にあたり、山全体を城とする雄大な構えです。このようなわけで、このたび大野城市に属する大野山全域(折込の図参照)を特別史跡に指定するようになったのです。

#### 日本史上空前絶後の大宰府の大防衛線

説 明 図



上図の③の官家 (筑紫大掌の府)を大野山(四王寺山)のふもとに移して大宰府とした。これが大宰府のおこりである。 ①水城(特) ②上大利水城(特) ③帝日水城(鎮跡) ④大土居水城(特) ⑤ 天神山水城 ⑥ 差山水城(明瞭な振跡) ※ 水城とは①より⑤にいたる大小の土塁(筋ぎょ用の土手)をいみし、特は国の特別史跡を示す。②以下は小型の水城である。 ※ 官家(みやけ)は福岡市三毛(みやけ)におかれたといわれている。



Կառուսներայուն Մեկայում Մարդայան Արագանի այս անդարան Մեկայուն Մեկայուն Մեկայուն Մեկայուն Մեկայուն Մեկայուն Մեկ

坂本口門礎石

この大野城に続く大宰府防衛の施設が御笠川の低地をふさぐ特別史跡水城跡で、左図では①です。 この水城は長さ約 1,000m、高さ約13mの大きな防塁です。

この水城の西に、左図で②③④⑤の4つの谷があり、これから大佐野にでて、大宰府を攻めるのには大変都合のよい地形になっています。そこでこの4つの谷をふさがないことには折角水城を築いても、これを避けて4つの谷にそれぞれ小型の水城を築き谷をふさぎました。大野城市にある上大利水城(地図の②)と春日市の大土居水城(地図の④)は特別史跡として昭和49年8月10日に追加指定が行なわれました。

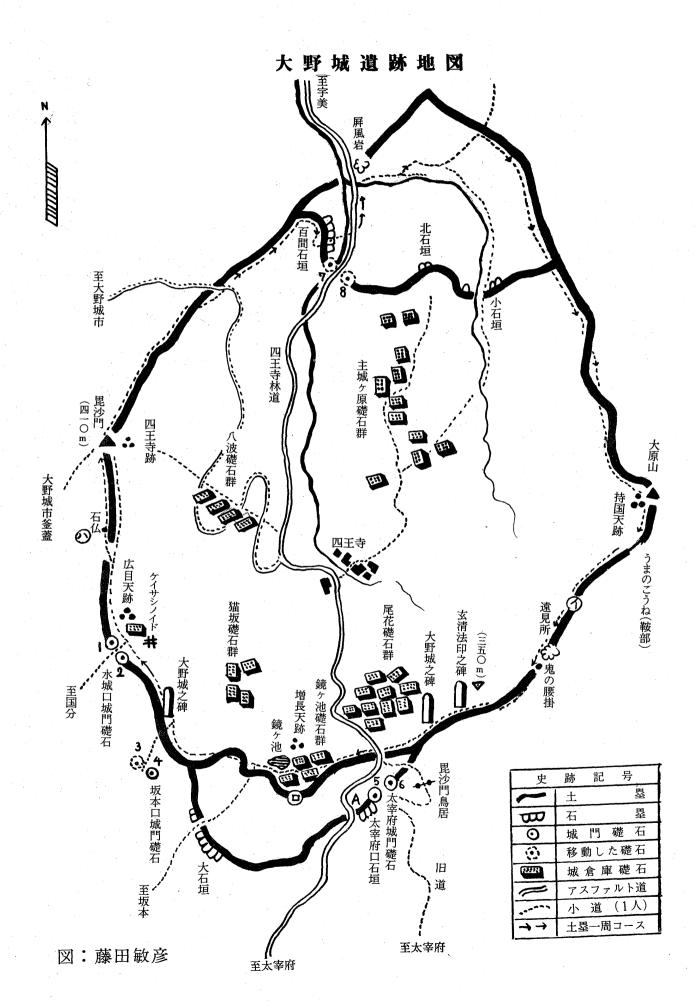
大宰府の西を守る砦(とりで)は左図で白い点線で示した山地即ち天拝山地で自然の山地を利用しています。これに続く南の防衛拠点が基肄城(きいじょう)です。この城も基山そのものを城とする大野城と同じ構えの朝鮮式山城です。この基肄城につづく構えが基山水城で、地図では⑥です。

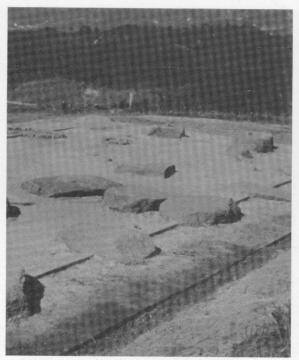
このように大宰府をなかば包み守るように20kmにわたり連続する大野城―水城―天拝山山地―基肄城―基山水城の大防衛線は、今から 1,300年の昔に築かれたもので国土防衝施設としては日本史上、まだかってない空前絶後の大規模なものです。大野城市に属する大野城の最高地点( 410m )の毘沙門よりみますと、びょうびょうたる玄海灘がかすみ、志賀島、能古島、博多湾、手前には板付飛行場が手にとるように見えます。左下には博多湾に上陸し、大宰府に迫る敵を「待て」といわんばかりに、水城が厳然とひかえています。南をのぞむと天拝山地、その左にらくだの背中の形をした基肄城がかすんで見えます。首を東にめぐらすと宝満山を仰ぎ、眼下に広大な大野城の城内(約 160h a 内水田10h a)をみおろすことができます。足もとから駆けおりる土塁をじっと見つめていると私達の祖先と百済から亡命してきたたくさんの人々が一体となり泥にまみれ汗にまみれて土を運んで土塁を構築している姿が、ほうふつとして浮かびます。ここは 1,300年の昔朝鮮の西海岸の白村江で日本軍が唐と新羅の連合軍に大敗し、国が危急に直面したとき、今の福岡市三宅にあったといわれる官家(みやけ、筑紫大宰の府)を奥地の安全な大野山の麓に移して大宰府とし、これを守るため水城を築き、その両翼に大野城、基肄城を築いた当時の歴史をはだで学ぶ景勝の地であります。(大宰府町教委嘱託)

土塁上に残る白雪

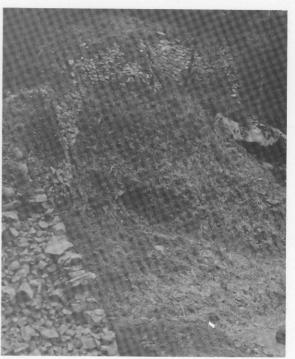




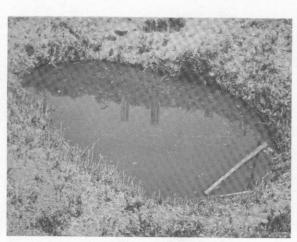




倉庫礎石 (増長天跡)



百間石垣



鏡ヶ池



炭化米

正月三日、大野城跡の最高の地である大野山(通称四王寺山)の山頂にある毘沙門天に、市有林の中をくぐりぬけて参詣するのは、大野城市民の正月行事として、かかせないものである。

大野山霧立ちわたるわがなげく おきその風に霧立ちわたる 山上憶良 の歌にある大野山は、大野城のあった一帯の山である。大野山には、大野城四天王の一つとして毘沙門天がまつってある。釜蓋から、雉ケ尾から、乙金から、三々五々寒風をついて登っていく。正月になって餅やおせち料理を食べてなまっている体には、この登山はなかなか苦しい。苦しい筈である。名にし負う大野城の 410m という一番高い城壁を、真正面から登っていくのであるから。

坂本口から登っても、水城から登っても、そんな大野城という山城の、自然の城壁を登っていくのであるから骨が折れる。

着ぶくれの服を、1枚2枚と手にしながら、息をきらし、汗をふきながら、山頂に達し、毘沙門天にまいり、新年の一家の繁栄を祈って石段を下る。そこからは大野城市街が真下に広がり、一軒一軒が手に取るように見える。年ごとに発展し変っていく姿を眺望して、新春の希望が満ちあふれるのである。

大野城市は、かっては黒々とした森の点在する中の家と、御笠川をはさんで広がる田園であったのだが、今や鉄筋の高層建築が白く輝き、赤・青の尾根瓦の住宅地帯はぐんぐんと広がり、緑の山野をむしばんでいく。

昭和のはじめ頃までは、この山頂から黒く続く西鉄大牟田線を毛虫のように小さく走っていく電車の姿が眺められたものだった。今はもう水城の堤防の所だけしか見えない。そのわずかに見えるところを、四王寺山麓を縫って走る高速道路が、水城の堤防をいっしょに横ぎっている。歴史を知る者は、高速道路は地下を走らせろ……といった筈だと思う。水城という歴史的大遺産を分断して、みすぼらしくしてしまった。

このように、大野城市・旧筑紫郡、そして福岡市をへて遠く博多湾玄海灘まで、指呼の間に見下ろ しのできる場所に、よくも大野城を築いたものだと感服する。

右側真下に水城の堤防を見つつ、遠い昔をしのびながらだらだらと坂を下って、大野城土塁の南端に達する。基肄城を右にして、南に遠く筑紫平野が展開する。そして、真下に都府楼跡、観世音寺ががあり、天満宮の森が広がる。

ひるがえって北を見れば、こんな所に住家かと思われるところに四王寺の集落があり、それをつつ むように今きた稜線が孤を描いて城内をなしている。この四王寺の集落を囲んでいる一帯に、土塁が つらなり大野城を形づくっている。古代城塞の第一とうたわれたのがうなづける。この山城の優秀さ は、この城内にもあるといえよう。

大野城という山城の優秀さは、山に登ってはじめてわかるのである。下から見ると平凡な山である

が、登ることによって城壁とわかり、山頂に達して城の雄大さを知り、古代の人々の偉業に感嘆する のである。



大野城市の名の由来する大野城は、地図の上では大野城市内にない、という人がいるかも知れない。 しかし、現実はそうではない。大野山(四王寺山)全部が大野城であり、「大野城跡」は山全体が指 定されるのも当然である。それにしても大野城市の先覚者たちが、大野山の数百へクタールの地に、 村有林―町有林―市有林として残してきた業績がたたえられてならない。

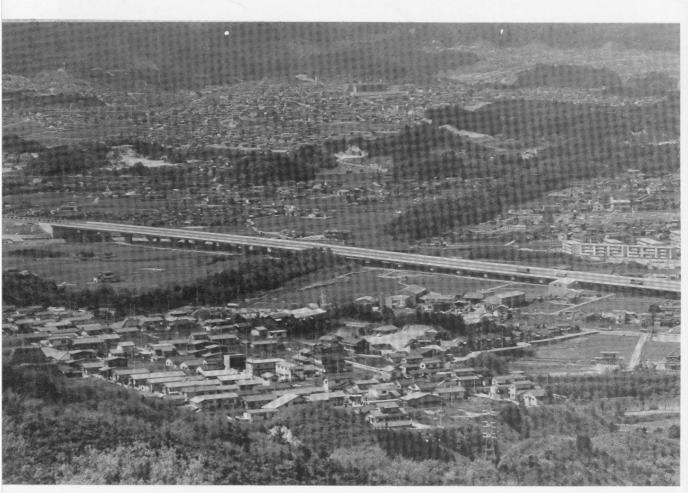
わたしは思う。大野城市民は、大野山に登ることがまず第一である。そして城壁のけわしさ、山城の雄大さを知って、大野城市の史跡として後世に守り伝える人となって欲しいものである。

(大野小学校長)

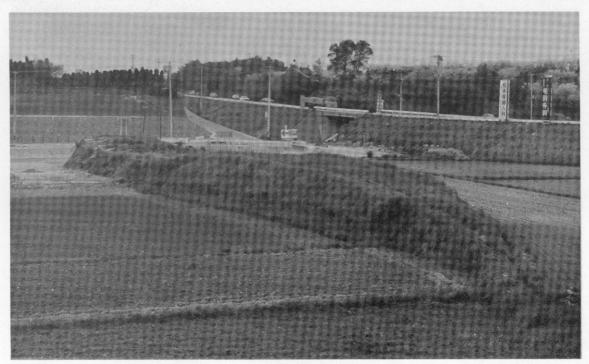
# 水城跡



吉松側からみた水城跡



大野山からみた水城跡



上大利谷蟹の水城跡

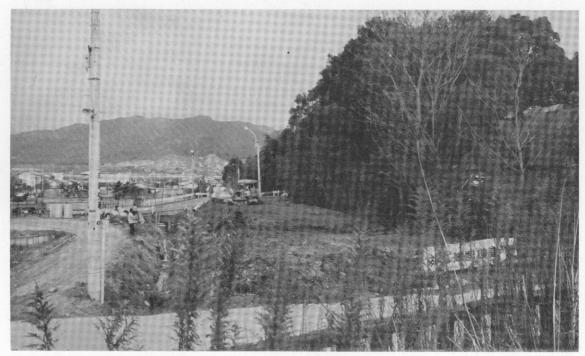


「国鉄水城駅」からみた水城跡

亀井明徳

水城大堤は、博多から筑紫に広がる平野の最狭隘部の筑紫郡大宰府町と大野城市を含む、全長約1キロ、基底部幅40メートル、高さ13メートルの人工の盛土による土塁である この土塁は、天智2年(663)9月の白村江(朝鮮忠清南道錦江河口)の戦によりわが国遠征軍の大敗、撤退の翌664年に造られたものである。天智3年紀には「是歳、対馬嶋、壱岐嶋、筑紫国等に、防と烽とを置く。又筑紫に、大堤を築きて水を貯へしむ、名けて水城と曰ふ」と簡潔に記されている。対朝鮮外交の一大転換を迫られたこの時期は、国内政治も多難で、斉明天皇の朝倉橋広庭宮での崩御、中大兄称制下において、甲子の年の改革さらには大津宮遷都、即位、庚午年籍の制定等、律令体制の整備をひかえていた。

彼は、水城築造の前年の9月に百済脱出の貴族として銘記され、時間的にも水城構築に関与できる可能性がある。すでに土塁を築き防衛線とする発想があったことは、その時代的信憑性はともかくとしても、敏達記12年の条の火葦北国造刑部阿利斯登の子、達率日羅の進言に「壱岐、対馬に、多く伏兵を置きて……毎に要害の所に堅く塁塞を築かしむ」の記事があることからもうかがわれ、興味深い。要害とは又々の転であり、塁塞は内と外とを隔てる壁・垣である。垣のキは城であることは本居宣長のすでに説くところである。従って府郭の内と外とを隔てる目的のためには、水城大堤のみでは不充分であり、郭内に通ずる間道に同種の塁塞を構築している。すなわち、南、有明海一肥後一筑後を結び郭内に入る佐賀県基山駅関屋に基肄築堤をつくり、北、博多から西へ迂回する間道に当る大野城市に上大利築堤、春日市に大土居築堤を天神山築堤等をつくり万全を期している。これらは水城大堤に比較して、いずれも小規模であるので小水城と総称されているが、広義の水城に含められる。しかしながら、築城以後これらがどのように活用されたかについては詳らかでない。正史に残る唯一の関係記事は、続紀天平神護元年(765)「少弐従五位下采女朝臣浄庭を修理水城専知官と為す」の記述で、この時も対新羅との外交関係が悪化し、防衛の緊迫したなかで、大宰大弐の佐伯今毛人を築怡土城専



国鉄水城駅からみた水城跡と大野山

知官と為した記事につづけている。この他関連記事を掲げると、万葉集巻 6、天平 2 年 (730) 冬12 月の大伴旅人および娘子の作歌、小右記寛弘 2 年 (1005) の「水城に着きて、印鑑を請取り (云々)」 \*\*\*\* 夫木集大宰大弐蒔原高遠の歌平家物語、平家大宰府落の叙述などに散見する。

水城の構造的な面では疑問の点が多く調査も十分に行なわれていない。とくにその貯水については解明されていない。水城大堤は東・西の2ケ所に門を設け、中央部は御笠川が貫流し欠堤となっている。従って内側すなわち府郭内に貯水した場合は欠堤部と門の部分の水の処理に多くの未解決の問題を残している。また土塁の断面をみると、二段構築で外側に平坦面をつくり、傾斜は急勾配であるのに対し、内側は緩傾斜である。内側に貯水すると想定するならばこの傾斜は逆で、内側を急に外側を緩にするのが通常の工法であり、この点からも内部貯水説は困難である。これに対し、外側に堀をつくり、ここに水を貯えたという考えもあり、小水城の1つである春日市大土居築堤では積土に続いて外側に堀を検出した。水城大堤についても同様に外堀ともいうべきものをつくり、ここに貯水したことは十分に考えられる。いづれにしても貯水の問題は今後の調査にまたなければならない。

(九州歷史資料館学芸第二課技官)

福地 通義

水城の築堤も終りに近づいていた。この年、朝廷の厳しいお達しで、御笠、長崗、次田、大野の村々はもちろん近国の農民も、数知れず集められて、東は大野山の麓丸山から、西は矢倉山の間に、いままで見たことも聞いたこともない大きく長い堤が築かれ始めた。

来る日も来る日も、近くの丘から土を運んで積み、積んでは築き固め、またその上に積んでいった。 それは苦しい労働の連続であった。

堤に近い大里 (大利) の農民父子も、この公役に狩り出されて、土を運びつづけた。何でも海の向うから猛々しい異国の兵が、この国に攻めてくるのを防ぐための堤であると、人づてに聞いた。

今日も、もう日暮れに近くなって、父と子は疲れきってはいたが、それでも一荷の土を前後にになって、堤の近くへたどりついた。

そこへ行き合った男たちが、「もう堤はでき上った」と告げた。父子は一時に力が抜けて、やれやれと一荷の土をそこへ投げすてた。

今、下大利の小字「父子島」という小高い土地は、その名残りという。

築堤が完成してから66年が経った。あの時の父も子もこの世を去って、すでに幾たびか春が巡り来、 秋も去った。天平2年 (730年)のことである。

大宰府の高楼は冬の日に映えていた。数年前から、府の帥として在任していた大伴旅人は、この年、 大納言に昇進して、奈良の京に帰ることとなった。



父子島…家並みの手前(向うの森は水城)

この日、旅人を水城で見送る府吏の中に混って、一人の美女があった。彼女は次の歌を旅人に捧げた。 おほならばかもかもせむをかしこみとふりたき袖をしのびてあるかも

| 倭ぢは雲がくりたりしかれどもわが振る袖を無礼とおもうな (万葉集巻六) この女について、万葉集は次のように伝えている。

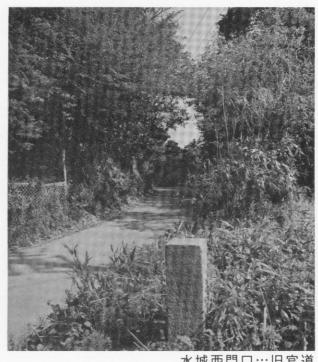
「右大宰帥大伴卿大納言に兼任し京に向って道に上る。此日馬を水城に駐め、府家を顧望す。時に卿 を送る府吏の中に、遊行女婦有り。其学を児嶋という也。是に於て娘子、此の別れ易きを傷み、彼の 会難きを嘆きて涕を拭いて自ら袖を振るの歌を吟ず」と。

別離哀惜の情は、旅人といえどもまた同じであった。そうして次の歌を児嶋へ贈り涙を拭いながら 府の官道を北へ北へと去っていった。

ますらををおもへるわれや水茎の水城の上になみだのごはむ

やまとぢの吉備の児嶋を過ぎて行かば筑紫の児嶋おもほえむかも

この場所は、いま水城の大堤を大宰府町の吉松から下大利へ越える、西門址と伝えられるあたりで あろうか。 (大野城市史跡対策委員)



水城西門口…旧官道

山田 立身

わたしは「水城の大堤」の近くに住んでいる。少年時代、下大利にある駅の名「水城」と、ときおり父に来るハガキの宛名がまちがって「水城村」と記されているのを見て、なんとなく不思議に思ったものである。

その頃はよく水城村の子どもたちと「けんか」をしたものである。夏の水遊びは、御笠川にかかる 鉄橋の少し上流にあった井堰が格好の場所であり、けんかの場所でもあった。

そこは今、水城の大堤が西鉄電車と御笠川と高速道路によって分断されているところにあたる。また、夏の子どもの楽しみにツケバリがあった。えさはドジョウである。このドジョウは大堤にそった灌がい用水路の小さな溝に、仲間とともに暑いさかりの2,3時頃取りにいったものだ。ツケバリは夕方大川(その頃は御笠川をこうも呼んでいた)につけた。そして翌早朝あげに行くのである。時には大きなウナギがかかることもあり、思えば実に楽しい遊びであった。こうした子どもたちを水城の大堤は温かく笑って見守っているように見えた。

晩秋の大堤の森はカラスのねぐらでもあった。夕暮れに群をなして飛び交うカラスの鳴き声は、なんともいえずもの悲しい響きとして今も心に残っている。陽気な春がツクシとともに訪れ、この森も厳しさから優しさへとよそおいを変えたが、中学時代の大堤は視野をさえぎられることもなく東西にこんもりと連なり、多感なわたしたちに「国家有為の人間たれ……」と語りかけているように思われたものである。

時には、旅行者が大堤の写真を撮っているのを見かけることもあったが、今は民家が建てこんでそれも思うにまかせなくなった。まさに今昔の感ひとしおである。

特別史跡保存の重要性はいうまでもないが、史跡周辺の自然環境についても史跡そのものの価値に 及ぼす影響を考えると焦燥の感なきにしもあらず……である。

それにしても、下大利地区の発展はめざましい。このような中で、わたしは、大伴旅人が都への帰路に詠んだ「丈夫と思へる我や水茎の 水城の上に涙のごはむ」の一首を思い、これから更に生活に密着した史跡保存をしなければならないのでは……と考えているのである。(春日中学校長)



福地 通義

A さんは明治24年の生まれだから、今年は84才になられる。

少年の頃は、村も農家ばかりで、田畑の耕作に必要だから、家ごとに牛や馬が飼ってあった。

A さんたちは、瓦田にある小学校から帰ってくると、すぐ家を飛び出して、その頃はまだ水量の多かった平田川に、遊びに行った。

辨慶蟹や、ハヤなどを獲って終日くらした。下流には、子供の背たけほどの深みもあったので、そこで泳いだ。

上流へ行くと、川から東の山裾にかけて、横堤という土居がある。ここは昔からの馬つなぎ場になっていて、耕作の間に、休ませてある馬が堤の上につながれて草を喰べていた。

田に水を張る頃には、その堤の上の「しば」を、四角にはぎ取って、田の水口にかぶせて、土止めにするならわしがあった。馬の足で踏み固められた「しば」は、丁度いい強さなので、堤の附近の田は、みなそれを利用した。

年々はぎ取っていたので堤も少しは低くくなったかも知れない。この堤が、谷蟹の水城である。

Bさんが、小学校の高等科を卒業した頃は、大正も終りに近かった。

その頃、国鉄の水城駅の東側に、県道が開かれることになった。それまでは、大宰府村の方へ行くには、もっと西側の、下大利から吉松へ越える古代からの道しかなかった。

この新道を開くためには、どうしても、水城の堤防を切り取らねばならない。この工事に、B さんも村の人たちと一緒に人夫に出た。

今と違って、史跡の保護などには、関心のうすかった時代でもあったので、Bさんたちは、水城の歴史的な価値の認識があるわけもなく、唯賃金目あてに、トロッコを押した。賃金は、四十五銭か五十銭くらいであった。

堤の土を切り取るときに、「しきみ」に似た木の葉や、木の枝などが出た。その木の葉が、今埋めたかのように、きれいな緑色をしていたのを覚えている。

今にして思えば、その枝も、緑の木の葉も、千数百年の間の国の盛衰をよそに、じっと土中に埋も れていたのである。

> 【追記】この一文を書くための取材に、ご協力を賜った、上大利の 井上孫兵衛さんや下大利の浅川英像さん、その他の方々に 感謝の意を表します。

> > (大野城市史跡対策委員)

---あとがき-

յունության արանական արանական

「大野城市の文化財」も版をかさねて7集目となりました。

そのなかでは、われわれの手元にただ1冊だけしか残らなかったものもあります。

「国特別史跡」というのは「国宝」という ことです。その意味で本市は「国宝」を「二 つ」持つことになります。

どうか意のあるところをお汲みとりいただきまして、「文化財」に対するいっそうのご 理解をお願いします。

※表紙カットは、文化財愛護のシンボルマークです

昭和50年3月発行

大野城市教育委員会



正 誤 表 下記のとおり誤りがありますので、おわびして訂正します。

30		and the second of the second o	
<b>~</b> >	行	誤	<b>E</b>
8	10	太宰府	<u>大</u> 宰府
25.	16	遠の宮延	遠の宮 <u>廷</u>
	16	<u>太</u> 宰府	<u>大</u> 宰府
	17	太宰府	<u>大</u> 宰府
	26	城 <u>内</u>	
11	5	これを避けて4	これを避けて、4つの
		つの谷に	谷より攻めこんできま
		l og skrivet kalleget Øde Lingskrivet	す。そとで4つの谷に
	23	大宰府町	太宰府町
14	15	尾根瓦	屋根瓦
18	1	<u>大</u> 宰府町	太宰府町
	23	又々の転で	ヌマの転で
	23	壁・垣である。	壁・垣で、この塁塞が
			水城にあたり、「内」
			すなわち大宰府郭と
			「外」すなわち博多大
			津とを隔てる垣である。
21	10	ますらをを	ますらをと
	12	<u>大</u> 宰府町	<u>太</u> 宰府町

昭和50年3月

発行 大野城市教育委員会

大野城市曙町2丁目14番地の1

印刷 永島産業印刷

福岡市西区豊浜町1丁目18の20